

多田の冬

日野善太郎

(一)

「松本親方はケチ」

「松本姐御はもつとケチ」

いつの間にか、これが飯場の仲間たちの通り相場になつてしまいました。

その評判も当然と言つてよいでしょう。

私が指のケガから内臓の病氣まで誘発して寝込んでいた時期のことです。

滋賀県の近江八幡に仕事があつて、平山親父が頭になつて乗りこみました。

私自身が行つてはいない現場のことですから、くわしくは知りません。しかし出張した連中の話は耳に入ります。

な姿を「アヒル艦隊」と呼びます。

松本親方は、その工事がはかどらないのでヤキモキしていました。

仕事は「杭切り」です。

松丸太の杭の余分な頭を、ノコギリで切り落すのです。楽な仕事ではありません。

一本切り終らぬうちに、ノコの刃に松ヤニがたまって、押しても引いても、どうしようもありません。

時々ベンジンでヤニをふきとつてやるのですが、そのために仕事は進みません。

ましてや、十分に水をふくんでいるので、ノコギリの重いことといつたらありません。

そこで平山親父が

「やつとられんわい。やめや」

と、最初に音を上げたのです。

体格、体力ともに抜群の親父がそんなですから、他の者が次々と仕事を投げ出したのは当然かもしれせん。

しかし、他の者とはかくも、五人力とも、十人力とも言われ、力自慢の平山が、イの一番に音を上げたのが、あやしいのです。

その程度の仕事で、尻ごみするような平山ではなかつた筈です。

「アヒル艦隊や」

「ひどいもんやで」

と、彼らは言うのです。

アヒル艦隊——わざわざ註釈の必要もないでしょうが、読者の中には、土木工事に不案内の方もいるでしょうから、余計な説明をつけておきましょう。

河川工事や、建築基礎工事などで、ヘドロ状の湿地で仕事をすることがあります。

長靴をはいて入っていくと、足が抜けなくなって、無理に足を抜くと、足は抜けたが長靴は元の泥の中に残っている——そんな現場で、土工たちが足掻きもがく姿が、当人たちの苦勞はさておき、はたから見ればアヒルのヨタ歩きに似て、おかしくも滑稽千万です。

そこで土工みずから自嘲をこめて、そんな仕事、そんな

かくされた魂胆がそこになかつたでしょう。病床で噂を聞いた私は首をかしげました。

杭切りの仕事は少しもはかどりません。

松本親方はイライラしています。

「請けとりをかけたらどうや」

と、平山が言い出したのはそんな時です。

松杭一本切つていくから、請負いにしたら、みんなの氣組みも違つてくるから、仕事もはかどる、と言うのです。

——何やらウサン臭い——

と松本親方も思つたようですが、切迫した工期のことなど考えると、結局、平山親父の申し出を吞まざるを得なかつたようです。

一つには、その頃、松本親方は肝臓を悪くして入院中でしたから、自身、現場へ出られなかつたということもあります。

出張工事のことは、平山にまかせるよりなかつたので、一本いくらと決まると現金なものです。

工事は目に見えて進行しました。

平山親父は自慢の鼻をびくつかせました。

「どんなもんじゃい。請けとりやつたら、みんな目の色変えて働くやろが」

と松本親方に言い、若い衆たちには「どんなもんじゃい。常備ではアホ臭うても、請け取りなら違うやろ」と威張りました。

はじめに音を上げて見せた平山は、若い衆たちを煽動してサボらせたのです。請け取りをとるための駆引きだったのです。

その駆引きに松本親方が気づかなかったとは思えませんが、知っていて太っ腹なところを見せたのでしょう。それで丸くおさまれば良かったのですが、かえってこじれてしまったのです。

というのは、一本幾らと決って、真ッ先に目の色を変えて仕事をしたのが、誰でもない平山自身だからです。

元来が、仕事自慢、力自慢の平山です。

みんなが今までのチンタラをすてて、懸命になると、人より余分に仕事をしなくては、世話役のコケンにかかわるとでも思ったのでしょうか。

切っつて、切っつて、切りまくりました。

すると、つられて他の者も頑張ります。アヒル艦隊が杭切り競走になりました。

元指物師の松川などは、体力と腕力では平山に劣るけ

れど、腕と若さと粘り強い性格でカバーして、平山以上に切ります。

平山が音頭をとってサボタージュしていたときは、一人一日一本をもて余っていたのですが、今や、五本、六本、人によっては十本以上も切る始末です。

十日でも無理と思われた仕事も、なんと僅二日で終りました。

これでは駆引きの芝居が丸見えです。

病床で話を聞いた私はハラハラしました。

しかし、無邪気というか、鈍感というか、

平山はじめ、出張組の連中は、

「オレは十一本切ったからいくら」

「オレは二十本切ったからいくら」

と銭勘定しているのです。浮き浮きとたのしそりです。

が、いつまでまっても、松本親方はその分の金を払いません。

平山が一回を代表して催促しても、口の中でムニャムニャいうだけです。

松本親方に見れば

(平山にはめられた)

と思ったでしょうし、腹の中は煮え立っていたかもしませんが、オクビにも出しません。ただ首を左右にし

て時を稼ぐばかりなのです。

そうしている内に、多田へ出張することになりました。今度は近江八幡が短期の出張だったのと違って長期です。

現地に飯場をつくらねばなりません。これは元請けである国土開発の強い要望でもあったのです。

この野丁場の責任者は、当時の松本組では平山以外には考えられません。

そこで、出張手当を出せとか、風呂場をつくれとか、平山がいくつもの要求を出した話は前回にくわしく書きました。

平山にしてみれば、近江八幡の請負賃金が未払いになつたままで、次の出張をハイハイと引受けられるか、と言ひ気持もあつたわけです。

松本は松本で

「平山の奴、目先の欲ばかりで」

とか、

「身内のくせに、若い衆を煽動して、ヘンな小細工しよつてからに」

と、心中おだやかではないのです。

ともあれ、多田行きの話は結着して、このついでのように、近江八幡の請負賃金も解決することになりました。

イエ、解決と言つては、働く者には不満が残ります。

松本親方が払ったのは、各個人の出来高をそれぞれ計した金額ではなく、常備賃金にいくらか色をつけただけだったので。

それ以来、

「松本親方はケチ」

ということになりました。

(二)

近江八幡の一件は、落着きというよりウヤムヤになってしまいました。

そのなるまでのいきさつをふりかえると、松本親方の心情は、推測して同槽出来ないこともありませぬ。

しかし「約束違反」は「約束違反」です。

かと言つて、それを親方に面と向つて攻撃する者もいません。

労働組合の無い悲しさとか、階級意識の欠如とか、大上段にふりかぶつた言い方も出来ませんが、それはその通りであつても、それだけではないものがあります。

たいていの飯場といえは、親方と子方が一つ屋根の下で寝起きしています。でなくともそれに近い形で生活しています。

そこに一種の連帯感が生まれます。

また、世間は土工飯場を特別の目で見勝ちです。何やら普通の人間とは違った犯罪者または犯罪者まがいの集団、或は荒くれ者、智能の低い者、精神の正常でない者の巢のように見えます。

その世間の目を、飯場に接む者はつねに意識しますし、意識させられずから、自然と自衛の気持が働いて、連帯感——仲間意識が強くなります。

一口に労働者といっても、大企業のオートメーション工場に勤める労働者と、路傍でツルハシをふる労働者を世間は同一の水平線に並べてはくれません。

土工たちの「はぐれ者意識」は、対世間的には連帯しながらも、土工同士ではたがいに反発したり、猜疑したり、各個に孤立的になり勝ちな面もあります。

彼らの多くは流動的です。長く一ヶ所にとどまりません。どこの飯場でも、構成人員の移り変わりがはげしいのです。

たぬしに、どこでもよろしい、行き当りばったり飯場に入って、一年辛抱してみると判ります。どんなに人

の出入りがはげしいかがよくわかるだけでなく、あなた自身がその飯場の古参株になっていることに気づくでしょう。

それほど流れ歩く土工たちの中には、いつかは流れ歩くことに疲れる者もいます。または流れ歩いているうちに居心地のよい土地なり、飯場なりを見つけます。

そしてその飯場に定着してしまいます。松本組には、それぞれの事情はどりであるにせよ、二年、三年の古顔が多かったのです。

そうして、近江八幡の杭切りに参加した土工たちは、そりうり古顔ばかりだったのです。

元々、はじめての出張に、出張先でトンコされては困るといふ親方の思惑もあったのでした。

古顔ばかりだったということ、つまり松本組の連帯感というか、親愛感というか、或いは親分子分意識というか、そりうりものが邪魔をして、親方の「約束違反」を正面から攻撃出来ないのです。

では何も言わないからそのまま不満は消えてしまったのかという、そりうりではありません。みんなの心の底に親方への不信感が根づいてしまったのです。

そしてそれが、事あるごとに「松本親方はケチ」というつぶやきになりました。

「日野よ、大金が入ったらしいやないか」

労災の一時金のことだと判りましたが、あいまいに笑っている、

「少しオレにも廻せや」

と冗談　めかして言ひのです。

目を白黒——たぶん、私はそりうり表情だったろうと思います。何と返事したものか、声がつまって何も言えませんでした。

冗談　めかしているけれど、その目に真剣な光があるのを、私は見てしまったのです。

つい何日前に、平山担擲に十万円貸したばかりです。まさか松本親方にまで同じようなことを言われるとは思ってもみなかったことでした。

「ハハハ、冗談や冗談や」

返事も待たずに親方は私を離れました。

とってつけたようなその笑い声が、かえって私の心を重くしました。

「俺にまで、ついあんな事を口に出してしまふなんて……」
——親方、よほど金に困ってるな。

と思ひました。

みんなは「ケチ」と言いますが、以前はそりうりではなかったのです。

たぬしに、松本親方はケチになりました。
肝臓が治って退院したあと、ということは松本がヤブノ建屋から独立を決心した時期でもありますが、目に見えてケチになったのです。

独立するばかりでなく、建築土木から純土木への転進を考へていた松本親方は、そのころ、ユニボやブルドーザーなどの重機を次々と買い入れていました。

土工の移動に必要なポンゴやハイエースも入れましたし、親方自身の自家用も国産ながら高級車に買い替えました。

その他にも、私たちの目にはふれな費用が必要だったと思ひます。

しかし、

「親方は今、経済的に大変なんだな」

と推察する者はいなくて、かえって

「自分はあるな高級車を気持ちよさそりに乗り廻しよつてからに、近江八幡の杭切り代はごまかしよつた。親方はケチや」

と思ひ者ばかりでした。

ある日——それは多田の現場でのことですが——仲間とはなれて測量している私のそばに松本親方が近づきました。